

大学出版

The Association of
Japanese University Presses

No.145

2026.2

冬

【特集】学術書をどう届けるか——持続可能な学術出版に向けて

学術書売るために、まだ何ができるか 菊池明郎 1

「知の公共性」の理想と現実 谷一文子 12

学術書は誰に、いつ、どう届いているのか 竹原昌樹 17

【連載】何年経っても忘れられない、編集者の一冊《20》

聖徳大学特別支援教育研究室 編

『改訂3版 一人ひとりのニーズに応える保育と教育

——みんなで進める特別支援』

森田 敦 表2

大学出版部ニュース 22

大学と社会を結ぶ
知のネットワーク



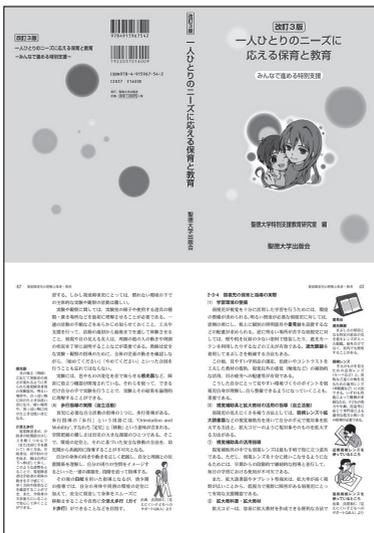
一般社団法人
大学出版部協会

何年経っても忘れられない、編集者の一冊《20》

聖徳大学特別支援教育研究室編

『改訂3版 一人ひとりのニーズに 応える保育と教育』みんなで進める 特別支援

森田 敦（聖徳大学出版会）



表紙は円を題材にやわらかいイメージを表現するようデザインしている

本文は段組を2段にして文章の横に用語の解説を記載している

表紙デザイン：曾野奈菜美
イラスト：穂坂麻衣 印刷・製本：弘文社 [聖徳大学出版会・2025年/A5判・並装・268頁・定価1760円]

本書は、障害のある子どもへの保育と教育に携わる者に必要な、最低限の基礎的な知識・理解を、最新の知見に基づいて提供することを旨とし、二〇一一年に初版が刊行された。その後改訂・増刷を繰り返して、現在も聖徳大学において特別支援教育の授業で教科書として使われている。先生方からは「ほぼすべての障害のポイントが一冊の中にとめられ、また文部科学省の示す各障害のコンセプト『心理・生理・病理・教育』に基づいて述べられ授業で使いやすい』などの感想をいただいている。

その内容は、特別支援教育について子どもの理解と指導・支援に必要な基礎知識を初学者にも分かりやすく解説している。全体を一三章構成とし、第一章で特別支援教育の基本について解説し、第二章から第一〇章で各障害（視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、発達障害など）について扱っている。また幼児期および児童期に焦点を絞り、初期段階における適切な指導・支援を行うためのノウハウを充実させている。

当時は異動の直後で、しかも新規の書籍や教科書の制作経験者はおらず、制作は文字通りゼロからのスタートとなった。授業開始までの限られた時間の中、印刷会社の方に「本はどうやって作るんですか」と尋ねたところ「本を作るんですか。本を作るということは、すばらしいことなんです。すべてを自由に決めることができるんです」と言われ、円い形の本を手渡された。その後、著者と装丁の打合せで「すべてを自由に決めて作ることができます。例えばこのように……」と言って、借り受けた円い形の本を紹介した。この打合せで表紙は卒業生のデザイナーに依頼し、サイズはA5判、本文の段組は二段とし、文章の横に用語の解説を記載することなどを決めた。出来上がったとき、「授業開始に間に合っただけよかった」と思った。そして、達成感がとても強く「本づくり」は「すばらしい」と実感した。一五年使われている教科書の制作に携われたことを、心から光栄に思う。

特集* 学術書をどう届けるか——持続可能な学術出版に向けて

学術書を売るために、まだ何ができるか

菊池明郎 (株式会社筑摩書房顧問、元代表取締役社長)

「出版不況」の現状分析

出版科学研究所の調査によると、二〇二四年の紙の書籍と雑誌の売上はやっと一兆円を超えて一兆五六億円だったという。これは出版業界の売上がピークだった一九九六年の二兆六五四億円と比較すると、約六二%売上が減ったことになる。もうすこし細かく見てみると雑誌売上のピークは一九九七年で一兆五六四億円だったが、二〇二四年は四一・九億円しかなく、ピーク時対比で約七四%も売上が落ちている。書籍売上のピークは一九九六年に一兆九三一億円だったものが五九三七億円と、約四六%ダウンしている。

次に電子を足した書籍と雑誌の売上について見てみよう。電子書籍(書籍、雑誌、コミックスの合計)の二〇二四年の売上は五六六〇億円となる。紙の書籍と雑誌の売上にこの

数字を加えると、一兆五七一六億円になるのだが、それでも一九九六年の売上の約六〇%にしかならない。出版物の売上は電子を加えても四〇%ほど下がったのだ。しかも電子書籍の売上の九〇・五%はコミックスが占め、書籍はせいぜい八%、雑誌はさらに少なく一・五%にしかならない。こうした現状は、全国の書店数が激減したことからもうかがえる。一九九九年に全国で約二万二〇〇〇軒以上あった書店は、二〇二三年には約一万九〇〇軒になった。そのうち実際の店舗を構えている書店(いわゆるリアル書店)の数は、八〇〇〇軒弱といわれている。そして書店のない自治体は四八二市区町村となり、いまや約二八%もの自治体に書店がないという。

このような状況のなか、もちろん学術書の売れ行きも右肩下がりが続いており、関係者はどのようにしてこの現状を変えていくか腐心している。この原稿も、そうした大学

出版会から「いまや新書や学芸文庫までをも擁する筑摩書房を再建した経験からアドバイスが欲しい」とのご依頼を受け、何か参考になればとお引き受けした。そう簡単に打開策が見つからないことはゆめゆめ承知しているつもりだが、出版の仕事に携わっている以上、多少時間がかかろうとも解決策を見つけなければなるまい。

学術書の置かれた状況

書店等で「学術書」とひと言で括られている書籍には、じつは一定の広がり・幅があるのではないかと思われる。私は必ずしも専門家ではないのでいささか極端な言い方になるが、ここでは便宜的に大きく以下の二つに分けたい。

一つは、各種助成金により刊行されるタイプの学術書である。これらは、例えば日本学術振興会の科研費研究成果公開促進費において「十分に市販性があるもの」が公募対象外となっていることに示されるとおり、そもそも売上が見込んだものではない。むしろ学術的意義という、売れる／売れないというのとは異なる評価軸において書籍として刊行する意義があると認められたものである。したがって一般の読者にはなかなか理解できないほど難易度が高かるうが、その分野の研究をされている人たちにとってはなくてはならないものだ。こうしたタイプの学術書は、おそらく非常に少ない初刷り部数が作られ、限られた書店やルートを通して必要とする研究者や学生の手へ渡っているの

であろう。その扱いについては、大学出版部協会の各出版部がよくご承知のことと考える。

他方で一流の研究者を執筆者に迎えながら、あくまでも一般読者に向けて著した各専門分野の初級・中級レベルの書籍というのも存在する。これらの書籍は、企画段階における読者ターゲットの設定上、少なくともモノとしてはアカデミックなことを学びたい、知りたいと思う一般読者にもある程度以上は理解できるレベルで書かれている。仮にそうならないのであれば、それは企画編集段階、すなわち販売促進以前の問題となる。ここでは、このタイプの学術書に焦点を絞って考えたい。

じつのところ、学術書の将来を考えるうえで重要なのは、初級・中級レベルの書籍をどうしたら売れるようにできるかということにひとまず尽きるのではないだろうか。そう申し上げるのも、ほんの十数年前までは、大手ナショナルチェーンを中心に、このレベルの学術書を潤沢に並べて販売する書店、またその売り場を切り盛りする書店員が大勢いらっしやっただからだ。それがいまや、ほとんどの書店で経営難により正社員の比率が落ち込み、その穴埋めをアルバイトやパートに頼らざるを得なくなっている。そのうえさらに、そうした人たちの数すらもじわじわ減少していることから、引き継がれるべき学術書販売のノウハウや周辺知識がうまく伝わらなくなっている。加えて、現場である書店内では、他ジャンルより内容の把握に時間を要する学

術書について勉強をする時間すら、人員不足のためになかなか取れなくなっているのが現状だ。

これは出版社の側から見ても苦しい状況である。何しろ、注文書等の資料を持参して書店に置いてもらいたい書籍について対面で説明することがスタート地点であるとの考えから、営業担当者が訪問して書籍の説明をしたうえで注文をもらおうとしても、書店側は多忙さのために対応する時間が取れなくなっているのだ。だからといって、メールや電話をしたり、あるいは郵送やFAXで注文書、パンフレットを送ったりしても、なかなか書店員には見てもらえない。いや、見てもらえているかどうかさえわからない。これだけさまざまなツールがある現代にあつてなお、やはり書店の担当者に注文書等を見てもらいながら説明をし、置いてもらいたい書籍のポイントを理解してもらうことも、置とも確実な方法だと感じている営業担当者も少なくないのではあるまいか。

では、このような困難な状況をどう克服していけばいい

●型を守り、破り、離れる。その謎と仕掛け。

守破離の思想

— 初心から成就へ

西平直

「守破離」は稽古の三段階。型を守り破り離れる。その内側には無数の謎と仕掛けが秘められていた。逆転の知恵、自己を磨く道。

のか。じつは筆者が現在非常勤取締役を務めている柏書房に新卒で入社した営業担当者が一つの可能性を示してくれた。ある種のメソッドでもあるので、その方法を開示するのめいかがなものかと悩んだのだが、よくよく考えてみれば営業の基本中の基本である。その足跡を追ってみよう。

ある新入社員に学ぶ

本年4月に入社した新卒の社員である。最初は先輩社員たちと同行してさまざまなことを教えてもらっていたのだが、3カ月を経過した頃から一人で書店をまわるようになった。とはいえ、新人に最初から大きな負担をかけてはいけないとの判断から、大型書店は担当から外した。だが、本人はそれでも密かに先輩社員と同レベルの売上を作りたいと考え、次のことを徹底しようだ。

① まず訪問する予定の書店すべてに数日前から電話で連絡をして、訪問してもいいという書店に絞って営



四六判 定価3850円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

www.iwanami.co.jp

業をするようにした。電話で社名を名乗ると「君の会社の本はうちには向かないから来なくていいよ」とはっきり伝えられるケースもあり、そのような場合は訪問しないようにする。

- ② 書店に到着すると、最初に必ず店内をチェックして、どのようなジャンルに力を入れているかを把握し、その書店に向くと思われる書籍を勧めるようにする。
- ③ 新刊の注文書ばかりではなく、既刊書でロングセラ―となっている書籍の注文書も必ずカバンのなかに入れるようにする。

- ④ 口頭で説明するだけでは説得しきれないことに備え、書影のデータをスマホに入れ必要に応じて使った。また書評等は事前に読んで頭に入れておくようにする。

- ⑤ 新刊はガラ等に必ず目を通し（全部ではないが）、書店員にきちんと自分の感想を説明できるよう心掛けている。

- ⑥ 自社のブックフェアで成功したお店と、同じような規模や立地の他書店の場合、必ずその情報を提供する。

- ⑦ 訪問した書店の読者層を必ずヒアリングする。

カバンはかなり重くなるようだが、本人はきちんと営業をやるにはそれくらいのことほこなさなければならぬ

考えているという。そしていまや先輩社員たちの受注金額を上回ることも多くなり、そのうえこれまでは柏書房の書籍の販売実績がほとんどなかった書店からも、かなりの注文をもらってくるようになった。そこで心配になった筆者が「受注した書店の実売がどうなったか、ある程度時間が経過したら、当該書店から教えてもらうように」と伝えた。その結果、なんと予想以上に多くの書店で売れていることが判明し、みな驚いた。つまりこの新人のやっつめたこととは、過去の売上実績にとらわれることなく、意欲のある書店とじっくり話し合うことによる新たな取引先の開拓であった。

こうした営業スタイルがそのまま学術出版社でもやれるかといえ、もちろん事はそう単純ではないだろう。しかしながらそれでも、この新人の努力から見えてくることは、まだ少なくない書店がきちんと書籍を売る意欲を失っていないということのように思われる。私たちはこれまで思い込みだけで「売れる」書店を決めていたのではないだろうか。そして学術出版社の場合、手掛けるジャンルが「学術書」というだけに、先入観から可能性を秘めた販路を狭めてしまっていないか、改めて自問してみてほしい。

書店・図書館と肩を組む

ずいぶんと昔のことになるが、学術出版社の団体である人文会の担当者をしていたことがある。筑摩書房の販売課

長として、会社更生法の適用を受けた会社をどう立て直していくのか悩んでいたとき、人文会の活動が目にとまった。筑摩書房が取り組んでいた「単品分析」とそれに基づく「単品管理」、それを継続することによって過不足のない新刊配本、常備の適正な配置、さらに返品・減少まで図れるという報告に驚いた。藁にもすがる思いで読んだ『出版販売の実態』（日本エディタースクール出版部、一九七八年）では、その内実がさらに詳細に開陳されていた。とりわけ当時みず書房の取締役営業部長で人文会の代表幹事も務められていた相田良雄氏が、この画期的な方法での販売を実践していた。そこで、筑摩書房は休会中だったところ、私は上司に復会し、さらには私を担当者にしよう求めた。こうして紆余曲折がありながらも、先進的な取り組みをしている人文会の先輩たちから学び、数年後になんとか筑摩書房もデータを分析・把握して効率のいい営業を展開できるようにになった。

さて、そんな「人文会」の活動でもっとも感心したのが

書店との研修会だった。当時（一九八〇年代）、書店にはまだ人文書の棚はあまり定着しておらず、出版社別の棚が目立った。なかでも一番多かったのは岩波書店の棚で、そのほか未来社などが目立っていたが、筑摩書房の棚はほとんどなかった。これも「倒産」の後遺症か……などと落ち込みかけたが、その危惧はすぐにも解消されることとなった。それが書店との研修会だった。その際に相田氏は、書店の担当者と面談をするたびに必ず「読者は出版社の名前で本を探しますか」と質問をした。そうすると「いや、著者やテーマで探します」という答えが返ってきた。そこでさすが相田氏は「そうでしょう。だからこそ人文書のように揃えるのが難しいジャンルはテーマ別に関連する本を並べなければ、読者はうまく本を探せません。書店の皆さまは大変な苦勞をされるかもしれませんが、テーマ別、つまり哲学・心理・社会・歴史などで本を並べて人文書の棚を作ってください。そのために人文会はジャンル別の基本図書を皆さまにお伝えします」と返すと、多くの書店人が納得

(新刊)

海関

ハンス・ファン・デ・フェン著／陳雲暹訳 中国近代性の国際的起源。太平天国後の中国がグローバル経済、政治へと引き込まれる道程を、究極の「お雇い」=総稅務司率いる海関の動きから捉える。5500円

新編 台湾原住民研究への招待

日本順益台湾原住民研究会編 今を生きる人々と、取り巻く社会の変化。最新の研究を基に、多様な生活・文化、その現状を紹介。3300円

メッカ大巡礼

渋谷洋子著 イラン人の妻として導かれて辿った祈りへの道。団体でなければ参加できない、貴重な1ヶ月の体験を、イスラム教やイラン社会とともに述べる。880円

(好評既刊)

中国の人類学を読む

西澤治彦著 自選書評集=1980～2020年。激動の40年を定点観測のごとく見つめてきた菅為は、そのまま優れた文化批評となる。2420円

宗教がひしめきあう都市に生きる

守田まどか著 法廷記録簿からひもとく18世紀のイスタンブル。雑居社会で、秩序管理の焦点は女性の貞節とよそ者だった。880円

ファシズム期の人類学

中生勝美・飯田卓編 インテリジェンス、プロパガンダ、エージェント。研究者たちは「権力」とどう向き合い、学知を深めたのか。3300円

風響社

〒114-0014 東京都北区田端 4-14-9
〒03-3828-9249 (定価は税込)
URL: <http://www.fukyo.co.jp>

してくれた。しかし、人文書ジャンルをテーマ別に並べるための基本図書に何を選ぶかはかなり大変な作業だった。会員各社は、これをクリアできない以上、人文書ジャンルの売り伸ばしはできないし、棚がいつまでも読者に対して不親切なままになってしまうという懸念から、困難な作業に立ち向かった。こうして数年が経ち、ようやく基本図書リストと研究者による人文書各ジャンルの小論文で構成された『人文科学の現在——人文書の潮流と基本文献』（人文会、一九八八年）という書籍が完成し、全国の特約店に贈られた。この書籍はあくまでも出版社と書店の人文書担当者のためのマニュアルとして作成したものであったが、朝日新聞等の書評でも取り上げられるなどちょっとした話題にもなった。その後『人文書のすずめ』とタイトルを変更し、数年おきに改訂版を発行し、書店等から重宝された。現在は、さらに『人文書販売の手引き』とタイトルを変更し、また紙版は廃止し、人文会のホームページで各ジャンルの基本図書が検索できるかたちになっている。

人文書のテーマ別の棚を定着させることから始まった書店との研修会は、その後も継続されて現在に至っている。書店だけではノウハウや周辺知識の引き継ぎ・蓄積が到底ままならない現在、いま一度このような機会を設けることで各分野の学術書の基本的な品揃え、また分野ごとの発展やトピック等について、書店の現場を守っている人たちとともに勉強をするように心掛けてみてはどうだろうか。大

学出版部であれば、そうした研修会への協力を各大学の先生方にも仰ぐことで、より密度の濃い研修会にすることができるはずだ。必ず成果は出ると思われる。

同様のことが、学術出版社ないしは学出版部と公共図書館との関係についてもいえるかもしれない。かつてリブ口池袋本店の店長、千代田区立日比谷図書館の図書部門長を務められ、現在は活字文化研究所の事務局長として精力的に活動をされている菊池壮一氏が出版社や図書館に働きかけているのが、「蔵書欠本調査」である。これは氏の図書館勤務時代の経験から考案されたことと思われるが、図書館における学術書の適切な購入・整備等につながる重要な提案でもある。最近の例では、氏の提案を受け入れた有斐閣が複数の公共図書館でこの調査を実施し、多くの成果をあげられたと報告されている。法律書の場合、法改正が行われると既刊書の内容に更新の必要性が生じる。それにもかかわらず古い版の書籍が開架されたままだと、利用者にも誤った情報が伝わってしまいかねない。そうした事態を防ぐために、専門的な知識を持つ出版社の社員が図書館の蔵書をチェックし、廃棄するべき書籍や雑誌を指摘するとともに、揃えるべき新版や改訂版の購入を提案するのだ。こうした活動は、予算が限られているうえに、司書が必ずしもあらゆる分野に精通していないことから学術書の選書ハードルがますます高くなっている昨今、重要性を増しており、今後も継続されなければなるまい。学出版部もま

た、こうした活動において大学図書館や公共図書館に働きかけることで、自らの強みを活かしながら学術書の普及・充実に貢献できるのではないだろうか。

読者を育てる、読者が育ててくれる

ここまで書店・図書館との関係性に焦点をあててきた。しかしながら、出版社と書店・図書館間の関係構築ないし連携・協力がうまく進めば問題は解決するのであるだろうか。残念ながら、そう簡単にはいかなないのが現実だろう。

数年前にある大学で学生向けの講演をした際、その大学の教授からこんな話を伺った。いまの学生に岩波新書や中公新書を見せると、「わあ、こんなに字がいっぱい書いてあるんですね」といわれることが多い。そこで「岩波ジュニア新書」や「ちくまプリマー新書」を見せると、これなら読めそうという反応が多く、驚かされると。もちろんすべての大学ではないだろうが、大学で学ぶうえで求められる基礎力ができていない学生も少なくないというところだろう。だとすると、初年次教育の段階で学問研究の基礎となる読解力を改めて身につける機会を提供する必要があるのではないか。私はこの一〇年ほど出版社仲間とともに大学の講義のお手伝いや図書館職員の研修会をしてきたが、きちんと教えれば、学生は真摯に取り組んでくれると実感した。大学出版部には、理解してくれる先生にお声掛けして「読書、あるいは読み方が学問研究にとっていかに重要

か」といったテーマで出張講義や単発のガイダンス講義などに取り組んでもらえないか、ご検討をお願いしたい。たとえ即効性があるとはいえないまでも、こうした活動が、大学生にもっと本を読んでもらい、いつかは学術書にも手を伸ばしてもらおうことに繋がると考える。

また、ひと昔前とは異なり、現在ではいくつかの地域で書店と図書館の連携が生まれつつある。書店も図書館も「本が売れるようにするには、あるいは読まれるようにするには、読者を育てることが必要だ」という認識を持ちはじめたことだろう。たとえば、筆者も実行委員を務める「やまなし読書活動促進事業（以下、やま読）」という比較的新しい運動をご存知だろうか。これは、二〇一二年に山梨県立図書館がリニューアルオープンした際、館長に就任した作家の阿刀田高氏が出版不況を憂いて「図書館長として読書活動が盛んになる取り組みをしたいし、またそのことを通じて地域が活性化することが図書館の使命だと思っ」、「地域の人たちは図書館で本を借りるだけでなく、地元の本屋で本を買って人に贈るという習慣を作ってほしい」と発言したことがきっかけだった。これに共鳴した地元書店の有志一〇社が「やまなし読書活動促進事業実行委員会」を結成し、そこに県立図書館や県社会教育課、東京の出版社、取次会社、業界紙等が加わったことで、二〇一四年に「やま読」は発足した。その後、大学図書館の参加によって、大学生の読書サークルまでもが積極的に参加し、夏休みに

小学生に読書の仕方を教えたり、ビブリオバトルや講演会などを開催したりといった活動に取り組んでいる。二〇二四年春には、そのうちの一つの大学に招待されて、筆者を含む出版社メンバーによる学生向けの出版業界セミナーを実施したのだが、我々が思っている以上に大学生たちが出版の世界に興味を持ち、出版不況にもかかわらず将来は関連する仕事に就きたいと考えてくれていよう、ある意味驚かされた。ちなみに、二〇二六年には別の大学でもセミナーを開催する予定である。

さて、このように「読者を育てる」といった話題になると、どうしても出版社が送り手で、読者はあくまでも受け手というイメージを抱かれるかもしれない。しかしながら、ここでお伝えしたいのは必ずしもそういうことではない。むしろ、筆者のみるところ出版社と読者との関係性は、何も上流から下流へという一方向的なものではない。そう痛感させられたのが、外山滋比古氏の『思考の整理学』（ちくま文庫）だ。本書に心打たれたという、さわや書店（盛岡市）の松本大介氏という文庫担当者（当時）が、自分の人生をふり返りつつ、その思いを「もつと若い時に読んでいけば：」そう思わずにはいられませんでした」という文言をしたためたPOPで表現してくださった。これがきっかけとなって、本書はロングセラーからミリオンセラーに変わり、東京大学・京都大学・早稲田大学・慶應義塾大学などで一番読まれた本に輝き、現在では累計三〇〇万部

を超えている。書店員かつ読書家ではあるが、松本氏もまた一読者であり、そんな彼の思いが一冊の書籍を大きく育てたともいえるのではないだろうか。昨今はSNS等がきっかけで読書の輪が広がっているとも耳にする。さまざまな書籍が読者を育て、その読者が今度は書籍を育ててくださる。そんな双方向的な循環・渦を生み出すことができれば、出版業界の将来も明るいものになるだろう。

書店を元気に——再販制度・マージン・定価

二〇二五年の「第三三回神保町ブックフェスティバル」は、開催予定日が二日とも雨天のため中止となってしまった。いつもは定価で書籍を購入してくださっている読者に、年に一回でも割引価格で購入できるこのようなイベントを喜んでいただけることは、ある意味で読者に対する恩返しのようなものといえるかもしれない。神保町でワゴンを立てて本を売っていると、「〇〇」という編集者は元氣か」とか「あの本はまだあるか」とか「こういう本を出してくれないか」など、熱心な読者が少なからず声をかけてくださる。読者サービスの場でありながら、温かい感想や励ましのお言葉のほか、いろいろなご要望やご意見を直接聞くことのできる場でもあるので、なるべく多くの出版社に出店してもらえればと思う。格好の市場調査、ないしはその練習の場であるようにも感じている。

そんな「神保町ブックフェスティバル」であるが、もと

もとは、作りすぎてしまった書籍を最終的に断裁処分等してしまおうのでは資源の無駄づかいになるのでなんとかできないかという世論に押され、汚れてしまった書籍や、手続きを経てバーゲン本に移行した書籍を割引価格で読者に提供する方法として開始されたものである。またさらにその後には、再販制度をめぐる公正取引委員会との一連のやり取りがあった。つまり、長年にわたる出版・新聞等の各業界との協議の結果、二〇〇一年三月に公正取引委員会が「再販制度を当面存置する」という結論を出した際、再販制度の弾力運用に取り組むよう求めたことに対して、出版業界が価格拘束を外す際のルールを定め、それを公正取引委員会が了承したのである。

こうしてみると、長年議論されつつも存置され続けてきた再販制度の弾力運用について考えることが、やはり今後の出版業界のゆくえを考えるうえで非常に重要な論点だと考えられる。ここで、念のため出版流通において重要な仕組みである再販制度についておさらいしておきたい。

① 部分再販……発売時から小売価格を拘束しない、つまり最初から非再販にする販売方法。再販契約を取次会社と結んでいる出版社であっても、その書目は非再販として扱われる。

② 時限再販……出版社が再販出版物を「新刊発売後」に非再販に切り替える販売方法。新刊時より一定の年月経過後（半年とか一年）には価格拘束を解くと表示する方法と、新刊発売後の経過を見て非再販に切り替える方法がある。

ちなみに「神保町ブックフェスティバル」の場合、時限再販の範疇で開催期間および販売箇所を限定し、その期間のみを非再販にする方法が採られている。

これと関連して現在、紀伊國屋書店とカルチュア・コンビニエンス・クラブ(CCC)、日本出版販売が進めているブックセライズ&カンパニーの取り組みについて、私見

明治神宮大全

全5巻

刊行開始

明治神宮編

各17600円

人々がつくり上げた神宿る杜、知られざる百年の物語
充実の論叢や詳細な百年史、初公開写真を含む年表、資料集、人物、団体事典の全5巻編成。「内容案内」呈
第一巻 論叢(1) 明治と祈り
祈り、祭り、和歌。各界の第一人者による五十の論考が明治神宮研究の新たな地平を拓く。(第14回)

日露戦争と日本像の転換

飯倉章著 欧米のまなざしから日本の自己像の鏡として
9350円
飯倉章著 欧米のまなざしから日本の自己像の鏡として
など新視点を提示。9350円

「平和国家」日本の軍事を考える

自衛・安全保障・国際協力
佐田明広著 国家像なく防衛政策を進めた歴史を考察。2750円

春夏秋冬の年中行事

新谷尚紀著 日本の暮らしと伝統月ごとの伝統行事を全国の事例を紹介しながら解説。2640円

歴史文化ライブラリー

乳と捨て子の〈近代〉

産み育てる現場から
沢山美果子著 いのちをつなぐ営みの変化を探る。1980円

明治維新という建国神話

「版籍奉還」とは何か
青山忠正著 維新史を「皇国史観」の呪縛から解き放つ。2200円

吉川弘文館

〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-8
☎03-3813-9151 / 価格は10%税込



2024年、第32回神保町ブックフェスティバルの様子

を述べてみたい。まず通常の取引において、書店のマージンを三〇%にするという方針が掲げられている。「人材を確保するためにも三〇%マージンは必要」とのことだ。先にも述べたとおり、多くの書店で人件費がかさんで正社員を減らざるを得なくなっており、長時間労働等のしわ寄せがさまざまに発生している。それらを解決するためにも、たしかに可及的すみやかにマージンを上げることは求められるだろう。そうすることで書店の雇用が安定化し、学術書をはじめとする書籍販売のノウハウや周辺知識が蓄積されるような環境への改善もそれなりに期待できる。では、それを可能にするために何が必要か。

ブックセラーズ&カンパニーからは、買切りをする書籍についてはマージン幅を大きくとの提案がなされている。筆者はこれにもう一つ付け加えるかたちで、「非再販」と

ワンセットの条件にすることで、書店のマージンを四〇〜五〇%程度に上げたほうがいいのではないかと考える。なぜなら買切りで定価販売のままだと、最終的に売れ残った書目の処分が書店の負担になってしまうが、こうすることで二〇〜三〇%引きでの販売（最終処分）が可能となるからだ。もっとも学術書は、ひととき買切り・非再販との相性が悪いジャンルであるだろうから、こうした取り組みには一般書をメインに手掛ける出版社が率先して参画を検討すべきであろう。

とにもかくにも出版業界が息を吹き返すためには、まずもって書店に元気になってもらうことがどうしても必要不可欠である。だが、そのためにマージンを上げるとなると、おのずと書籍の定価も上げなければならぬ。仮に書店が求める三〇%マージンを実現するとなると、少なくとも二〇%程度の値上げは覚悟せねばなるまい。しかし、この間もコストプッシュ型の値上げをせざるを得なかった出版社にしてみると、これ以上の値上げをした場合、もっと本が売れなくなるだろうという見方が大勢を占める。ましてやインフレが進む昨今、定価がさらに上がったら、ますます売れ行きは下がるだろう。そうした懸念ももっともだ。そしてこれまでも議論はここで止まってしまっていた。それではどうしたらいいのか。とりあえず書店が生き返るだけのマージンを提供するために本の定価を上げていくとして、まずは大幅に減らされた公共図書館の予算を回復させる運

動を起こしてみてもどうだろうか。公共図書館も大学図書館・学校図書館も図書予算は減額されているのが現状だ。これらの図書館の予算が回復し、さらに適切な蔵書がなされるならば、学術書や事典、図鑑等の売上も回復するはずだ。これまでの経験に照らし合わせると、定価を上げると一時的には売上が下がる傾向にあった。そうした影響を軽減するためにも、図書予算を一番多かった頃と同程度、ないしはそれ以上にしていかなければならない。いまこそ多くの出版関係者が力を合わせて文部科学省や各自治体等に働きかけるときなのではないか。

まずは凡事徹底から

さて、いささか大きな話にまで膨らんでしまったが、ここまで筑摩書房ならびに柏書房での半世紀以上にわたる経験から、非常に苦しい現状において何ができるかを述べてきた。くり返しになるが、いずれもあくまで学術出版社の営業スタイルではないため、必ずしもそのまま活用・適用することはできないだろう。しかしながら、「ただでさえジャンルを問わず厳しい現在の出版市場にあつて、ましてや学術書など……」とすでに諦めの境地に至つて、ただ緩やかに衰退してゆくのを座して待つだけではあまりに忍びない。

昨今はAIを用いた過去の類書実績に基づく配本も行われている。しかし考えてみれば、研究者たちがそれぞれ自

らの専門分野の研究成果を書籍のかたちに落とし込んだ学術書というのは、どのジャンルにも増して「新規性」「独自性」を有するはずである。ならば、ただ過去のデータからはじき出された数値にしたがつて配本するのではなく、そうした強み・価値を書店・図書館、ひいては読者にどのように伝えられるかが肝だ。

自社刊行物のポイントや感想を自分の言葉で伝えることができているか。書評などのパブリシティは迅速に書店と共有できているか。これまでの自社刊行物に対する理解を深め、時流に応じて既刊書の紹介・案内ができていくか。決して目からウロコのイノベーションな提案ではないが、いま一度改めて「凡事徹底」からはじめてみてはいかがだろうか。「諦めるな、出版業界」、そんなエールで本稿を閉じたい。

特集* 学術書をどう届けるか——持続可能な学術出版に向けて

「知の公共性」の理想と現実

谷一文字 (株式会社図書館流通センター代表取締役社長)

大学図書館と公共図書館

二〇二二年の春、慶應義塾大学大学院文学研究科図書館情報学専攻情報資源分野に入学した。おもな理由は二つある。一つ目は、新型コロナウイルス感染症の影響で地方出張や会食がまったくなくなり、仕事に余裕ができたこと。

二つ目は、その年から某女子大学の図書館司書課程の講師をすることになったのだが、資格取得のためにとりあえず図書館情報学を学んだだけの私が入りに教えることなどとてもできない、と思ったからである。また、アカデミズムと現場の乖離が気になっていたし、最新の知見を吸収したい、学び直したいという気持ちも強かった。

幸いにして、慶應義塾大学は戦後初めてライブラリースクールが設立されただけあって、その図書館の充実ぶりに感嘆した。国内外の学術雑誌や有料データベースがほとん

ど購入されているうえに、デジタル化のおかげで二四時間あらゆる資料を閲覧することができた。また早稲田大学とも提携しており、利用のほか、慶應義塾大学図書館に所蔵がない図書や他の人が貸出中の図書を取り寄せることもできた。さらに図書館のそばの建物内には、少額を支払えば利用できる大学院生専用の個人キャレルがあり、私もそこに論文執筆に欠かせない図書や資料を並べていた。アメリカの大学には図書館に住んでいるような学生がたくさんいると聞いたことがあったが、このキャレルにも私物が散乱しており、早朝から夜遅くまで論文執筆に励んでいるに違いなかった。同期入学の社会人大学院生とはいつも「図書館が充実しているおかげで高い授業料の元が取れたね」と節約術みたいな話をしていた。

翻ってみると、日本にはまだ、これほど膨大な資料と二四時間利用可能な機能を有している公共図書館は存在しな

い。有料データベースの数などは、ビジネス支援を掲げる比較的大きな公共図書館であっても、慶應義塾大学図書館の足元にも及ばない。当時、図書館流通センター（以下、TRC）も電子図書館の普及に着手したところだったが、提供できるコンテンツの少なさとアクセスの集中が課題となっていた。それでも、コロナ禍において利用できる「非来館」型のサービスとして爆発的に普及し、弊社だけでも二〇二一年まで七万五〇〇〇タイトル増えた。また、いまや一八万六〇〇〇タイトルまで増加した。また、雑誌や児童書の読み放題パック、オーディオブックも採用されている。電子出版制作・流通協議会の調査によると、導入している自治体数は六一〇にもものぼる（二〇二五年一月現在）。しかし、学術書に焦点を絞ると、その実態はどうかであろうか。

学術書所蔵の実態

この原稿依頼がきたとき、学術書といわれているものが果たして公共図書館でどのように位置づけられているのか、改めて調べてみた。公共図書館には必ず選定基準というものがあ、ホームページ上でそれを公開しているところも少なくない。たとえば東京都立図書館の場合、次のような基本方針が掲げられている。

一 資料の収集においては、区市町村立図書館との役割

割分担に留意するとともに、都内公立図書館、国立国会図書館、大学図書館、及び専門図書館等同種施設の蔵書構成をも考慮して収集する。

ここからは、なんでもかんでも収集するのではなく各館の得意分野ごとに住み分けようね、といった意図を読み取ることができよう。

では、実際のところ学術書は、どこに、どれだけ所蔵されているのだろうか。試しに、当社が発行しているTRC MARC（図書館サービス円滑に動かすためのデータベース）において学術書と位置づけられている『メディアとしての福沢諭吉』（都倉武之著、慶應義塾大学出版会、二〇二五年、定価四九五〇円）を検索してみると、東京都立中央図書館をはじめ、全国の公共図書館のうち三〇館程度にしか所蔵されていなかった。さらに第七七回毎日出版文化賞特別賞、第四五回サントリー学芸賞社会・風俗部門、第四五回日本出版学会賞の三つの賞に輝いている『杉浦康平と写植の時代』（阿部卓也著、慶應義塾大学出版会、二〇二三年、定価四四〇〇円）を検索してみたところ、全都道府県立図書館のうち五県の県立図書館には所蔵がなく、他方で七七の市区立図書館には所蔵があった。方針にもあるとおり、近隣の大学図書館や博物館、美術館と連携して蔵書を進めていることが背景にあるのだろうか、大学も含めて県内に一冊も所蔵がない都道府県も一つあった。

では、高額な学術書であるにもかかわらず売れた図書は何か。弊社内のデータによると『恐竜学』（小林快次編、東京大学出版会、二〇二五年、定価六三八〇円）である。じつのところ、恐竜は公共図書館や学校図書館で比較的良好に利用されるテーマの一つで、「図書館を使った調べる学習コーナー」（公益財団法人 図書館振興財団主催）への応募作品でも、恐竜について調べる児童生徒が例年一定数いらっしやる。恐竜はすでに絶滅しているだけに、発掘調査や博物館へ行ったり既存の研究資料をくまなく調べたりする場合が多く、利用者はかなり難易度の高い資料もずいぶん読み込んで印象だ。こうした蔵書状況からは、公共図書館でのコアな利用があるテーマの図書であれば、学術書であっても比較的需要が大きいといえるだろう。

加えて理系分野についていえば、活躍のフィールドが論文中心であることから、そもそも著書が少ない。しかしそれでも、二〇二五年のノーベル化学賞に輝いた北川進氏による『集積型金属錯体』（講談社、二〇〇一年、定価六六〇〇円）などのように、著書が存在しないわけでは決していない。しかも同氏の場合、著書のほとんどが「実務（特定の職業）」対象と位置づけられていることから、すでに多くの企業で活用されている研究成果なのだろうと推察できる。またノーベル賞などの受賞者が発表されると、一般読者のあいだでも関心がにわかに高まるようで、公共図書館には必ずといっていいほど所蔵の有無に関するお問い

合わせが寄せられる。そして、そのときに所蔵している図書館はある意味「先見の明あり」となるわけだ。

さらに賞といえば、TRCMARCには受賞情報のタグを設けており、芥川龍之介賞や直木三十五賞といったメジャーなものから小さなもので数々の文学賞のほか、サントリー学芸賞やアジア・太平洋賞、日経・経済図書文化賞などを検索できるようになっている。これは、名のある賞を受賞した図書は選書される可能性がグッと上がり、買い漏らした既刊本であっても後から購入することがままあるからである。

だが、三冠に輝いている『杉浦康平と写植の時代』の蔵書状況を鑑みると、収書方針に掲げられている「役割分担」がどれほど実現されているかについては疑問符がつく。

「役割分担」と「連携」

この点については、図書館法にも言及がある。同法では、第二条において「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」と図書館を定義しており、つづく第三条で「図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望に沿い、更に学校教育を援助し、及び家庭教育の向上に資することとなるように留意し、おおむね次に掲げる事項の実施に努めなければならない」としたうえで、以下のようにある。

知泉書館

全五巻 完結

倫理学講義

山田晶著 / 小浜善信編 中世哲学研究の泰斗が京都大学等退職後に行った南山大学での講義の集大成。哲学・倫理学の深い学識と膨大な知識を活用、若い人たちに興味を与え、若くは簡潔な論理を分かり易く語る。学問と人生を知るために、今日でも広く読まれるべき名講義の数々。
四六/400~496p/各 3500 円

日本文化と宗教

「和」の伝統の功罪

岡野治子 社会の規範を支える宗教と、個人をつなぐ和の原理を、日本人はどのように生きたか
四六/372p/3000 円

シェリング講義

同一哲学の鍵としての「反復の同一性」

〔知泉学術叢書〕

M. フランク/久保陽一・岡崎秀二郎監訳 著者の深い見識に支えられ、シェリングによるドイツ観念論の独自の理解を示す
新書/688p/6200 円

内在の臨界

生の現象学と現代フランス哲学

米虫正巳 アンリの内在概念を出発点に、現代の哲学者との対話を通じ、「内在」の可能性を探究
菊/422p/6000 円

生命操作と人間の尊厳

田坂さつき編 医療・哲学・倫理・宗教などから生命倫理の問題に迫り、現代の多様な人間観を問う
菊/366p/6000 円

東京都文京区本郷 1-13-2 (税別)
TEL03-3814-6161 FAX03-3814-6166
<http://www.chisen.co.jp>

つまり、こうした規程に則って各公共図書館は、土地の事情や一般公衆の利用・希望を考慮しつつ、バランスの取れた資料収集に取り組んでいるのだ。その結果、確実に購入する資料の第一位は郷土資料となり、学術書の優先度は低くなってしまふ。そのため、事実、私が地方都市の公共図

他の図書館、国立国会図書館、地方公共団体の議会に附置する図書室及び学校に附属する図書館又は図書室と緊密に連絡し、協力し、図書館資料の相互貸借を行うこと。(同法第三条四)

だが、いくら連携を深めるにしても、購入となれば問題は予算だ。日本図書館協会の二〇二四年の調査によると、全国に公共図書館は三三一九館あり、資料費のなかの図書予算費は一館あたり平均六三三万円である。東京二三区や政令指定都市などは予算額が大きいことを踏まえて県立図

公共図書館のお金事情

書館司書だった時分も、学術書を読みたい、購入してほしいという利用者に対しては地元の国立大学図書館をご紹介することが多々あった。しかしながら他方で、互いの蔵書に口をはさむようなことはなく、先に挙げたように、県内に一冊も所蔵がないといった事態が生じているというのもまた事実だ。もちろん相互貸借を実施している公共図書館もすでに存在するものの、それでもまだ「役割分担」「連携」のさらなる深化・向上の余地はあるだろう。冒頭で触れた慶應義塾大学と早稲田大学の図書館の提携は、そのヒントとなるかもしれない。

書館だけでみると、平均四一五万円とびつくりするほど少ない。つまり、そもそも一年間に（コミックスや学習参考書を除いても）七万点もの書籍が発行されるなか、公共図書館が購入できる図書の冊数は微々たるもの（単価二〇〇〇円の図書を三二〇〇冊弱賄える程度）なのだ。それだけに比較的高額な学術書となると、そのハードルはいっそう高く、「権威ある賞に輝いた」「類書がない」といった理由づけや、図書館によっては外部委員を交えた選書会議なるものでの稟議が必要になる。この点について、弊社では公益財団法人図書館振興財団「専門書・学術書選書委員会」（現在の委員は宇田隆幸氏、太平睦美氏、織田裕行氏、多賀谷津也子氏、月本一武氏、橋本敬三氏、東野善男氏、日出弘氏の計八名）による推薦を可視化することで、あらゆる分野に精通しているわけではない司書であっても、より適切に選書ができるような環境づくりに取り組んでいる。

周知のとおり、国立国会図書館は納本制度によって、すべての資料の収集が義務づけられている。しかしながら、限られた、しかも非常に少ない予算しか充てられていない公共図書館にあって、すべての資料を購入することなど到底不可能である。たとえいかに優れた書籍であったとしても、購入にはどうしても予算上の限界があるのだ。また国立国会図書館といえども、オープン・サイエンスが国際的な潮流になりつつある現在においてなお、公共配信で公開されるデジタル資料は、原則として著作権の切れたものと

絶版になったものに限られる。そうであればこそ、図書館法と各公共図書館の収書方針に掲げられた「役割分担」「連携」のさらなる深化・向上について真剣に検討していく必要があるだろう。

学術書と公共性

もちろん、学術書のような研究成果はひろく一般にアクセス可能な環境に整備していかねばならないし、大学や研究所に所属せず在野で日々研究・調査に取り組んでいる方や大学図書館を自由に利用できない方も確かにいらつしやる。その一方で、ベストセラー小説などが県内に何冊も蔵書されている現状を鑑みたととき、学術書であっても、せめて一県に一冊は購入できるだけの予算が欲しいと切に思う。いずれにしても、公共図書館側はつねに予算との「にらめっこ」なのだ。また、あくまで試案であり、かつ実現までの道のりは想像を絶するほど遠いことを重々承知しつつも、これと関連して理想像を描かせてもらうならば、学術書（とりわけ日本学術振興会が助成している研究成果公開促進費によって刊行されるもの）については、電子データを全国の都道府県立図書館に無償提供されるとなればよい。いや、むしろそれこそが、その本来の目的に合致するとさえいえるのではないだろうか。

特集* 学術書をどう届けるか——持続可能な学術出版に向けて

学術書は誰に、いつ、どう届いているのか

竹原昌樹 (東京大学消費生活協同組合 本郷書籍部 店長)

大学と学術書

「コミックスでも、文芸書、児童書、ビジネス書でもなく、学術書を誰が読んでいると思うか」と問われれば、まずは研究者⇨大学教員が思い浮かび、次に大学生をイメージされる方が多いのではないだろうか。だからこそ、大学のキャンパス内にある書店、それも東京大学のなかにある書店ならば、学術書の売り方に何か違いがあるのでないかと思われて、今回の執筆依頼がきたのだろう。

では何か違うところはあるのか。みなさんがよく行かれる書店で、入口すぐの目立つ場所にはどのような書籍が置いてあるだろうか。思い浮かべてみると、私が最初に挙げたような書籍ではないだろうか。来店されるお客様の多くがどのようなジャンルの書籍を求めているかで、入口付近に置かれる書籍が決まる。

では本郷書籍部の場合、ここに何が置かれているか。それは新書だ。「学術書の話は？なのにな、新書ですか」と思われる方もいるかもしれない。だがそれは、専門的な内容を一般読者向けにわかりやすく説明している入門書という昔ながらの新書像をイメージされるからだろう。しかし近年の新書を見ると、内容が明らかに学術的で、入門書にしてはかなりの予備知識が必要だと思われるものも増えてきている。単行本では高額になってしまうので、新書で安く読者に届ける一形態へと変化しているのだろう。

こうして手に取りやすい学術書として新書を一番目につく場所に置いているわけだが、本郷書籍部では、さらにその横に手軽かつ安価に読める文庫を陳列している。ただこちらも他店と違って、小説の文庫版ではなく、もともとは単行本として刊行された学術書を文庫化したものなど、教養・学術系の文庫を中心に品揃えしている。

このように、知的創造の拠点である大学のキャンパス内に店を構える書店だからその色を、入口から出せるように努めている。もちろん入口付近だけでなく、店舗全体を見ても、在庫している書籍の八割以上が学術書と、かなり偏重した品揃えになっている。つまり、多くの方が手に取りそうな書籍をとにかく取り揃えるのではなく、学問のトレンドを意識した独自の方向性で書店づくりをしてきたのだ。そのためたとえば、まだ聞きなじみのない言葉であっても、よく購入される学術書のタイトルに頻出のものは意識するようにしている。その後、そうした言葉が学問のトレンドに結びつくキーワードとなることも少なくない。

「開かれた」書店

「そんな本郷書籍部の中心となるお客様は誰か」と聞かれれば、もちろん東京大学本郷キャンパスで研究をされている学生・教職員・研究者となる。これはどの大学に店舗を構える大学生協も同じで、教科書を中心とした学術書の販売が大学生協における書籍事業の大部分を占めている。

しかしながら教科書を中心とするという点が、本郷書籍部ではすこし異なる。本郷キャンパスは三・四年生をメインとしたキャンパスであるため、教科書が指定されない専門性の高い講義が多く、したがって全体の売上に対する教科書の割合が大学生協のなかでも比較的低いのだ。だからこそ、それ以外の利用も追及しなければならぬ。

つまり、学生の教科書購入だけには頼れない本郷書籍部としては、他の方々にも関心を向けてもらえる書店づくりを意識していて、その効果なのか、他の大学生協ではあまり見かけないお客様がいらっしやる。その筆頭が東京大学のOB・OGで、東京大学以外の各種機関で研究を続けられている方々だ。たとえば東京大学を離れても、「研究資料となる書籍をまとめて手に入れるなら本郷書籍部だ」と思っただけで引き続き利用していただけるのは嬉しい限りだ。

また、最近では近隣の方も増えてきている。文京区自体もともと書店の少ない地域ではあるが、お話を伺っていると「近所の書店が閉店して、ずっと購入していたラジオ講座のテキストが手に入らず、本郷書籍部ならあるのではないかと思いきてみたら置いてあった」と喜んでいただけだ。

さらに遠方からの学術書に関するお問い合わせもよくある。どこの書店であっても、注文すれば、名前をあまり聞いたことのない出版社の難しそうな書籍でも入手できるのだが、知らない人からすると「この書籍は本郷書籍部ではないと手に入らないのでは」と思われる方もいるようだ。

大学内という限られた商圏内ではか営業できないのは不利な点ではあるものの、本郷書籍部は東京大学内という地の利を活かしつつ、このよう到来店されたことのない方々までもが大学内の書店に寄せる「学術書については、大型書店になくても大学生協であれば在庫があるのでは」というイメージや期待に沿った品揃えを続けてきたことで、大

学生協では珍しい「開かれた」書店となっている。

デジタル化の進展が与えたもの

このように、学術書に興味を持つ多くの方々に支えられて営業を続けているわけだが、ご多分に漏れず、利用者（購入者）が年々減少している点は否定しがたい。その原因の一つに書籍のデジタル化が挙げられるが、その中心はコミックスであり、まだ学術書にはその波がきていない。教科書だけで見ても、本郷書籍部では電子版を採用指定されるケースは現状なく、過去には電子版と紙のどちらかの購入を指定された講義もあったが、その場合も電子版を購入する学生はいなかった。たしかにデジタル化の影響でコミックス・雑誌の売り上げは落ちてきている。ただ学術書に関していえば、デジタル化が急速に浸透しているかは疑問である。むしろ学術書を通じて知識の探求を深めていくタイプの方々は、まだまだ「紙で読む」という習慣をお持ちのようだし、しかし、だからといって学術書は安泰だなどとは当然思

っていない。学術書も年々購入者が減っているのは事実であり、デジタル化の進展が与えたものを「紙版から電子版へ」だけで見ても意味がない。情報を得る手段としての「書籍」の地位低下について見つめ直すことが必要だろう。

物価高騰もあり、いままで以上に学生から「書籍は高い」といった声を聞くようになった。だが生協の書店で二〇年以上働いている私の実感としては、学術書（単行本）の価格はほとんど変わっていない。そもそも学術書は特定の専門分野に携わる人を読者として想定している書籍であり、おのずと少部数の発行となってしまう。そうすると、本来であれば「高い」といわれる現在の価格よりもさらに高価なものとなるのが必然なのだが、実際にはそうはなっていない。少なくとも学術出版社の場合、現時点においてすでに無理をして価格を維持している面が見受けられるのだ。また、インターネットを介して情報をタダでいくらでも手に入れられる現状において、いまや東大生にとっても「高

見知らぬ人を認識する

パレスチナと語りについて

ハンマード 暴力を支える語り
をいかに解体するか。サイド
を手掛かりに、ジェノサイドに
抗する。岡 真理訳・解説 ¥2970

つくられた日本の自然

「日本の自然」は
どのように語られてきたか

大貫恵美子 始源の稲、万葉歌
の四季、枯山水、文化的ナショ
ナリズム、消費主義。自然とい
う作為の人類学的研究。¥3520

ジーン・マシン

細胞のタンパク質工場
「リボソーム」をめぐる競争

ラマクリシュナン 全生命のタ
ンパク質工場の謎を解く。ノー
ベル化学賞を受賞した構造生物
学者の自伝。大田直子訳 ¥3960

クロコダイルに 魅せられて

福田雄介 ワニの研究者になり
たい、の一心でオーストラリア
へ。政府機関でワニ保護管理を
研究する男の情熱の半生。¥2860

開発プロジェクトとは何か

不確実性のデザイン

ハーシュマン「20世紀のもっと
も桁外れの知性」M・グラッド
ウェル。記念碑的研究を平易に
新訳。佐藤仁・杉浦菜月訳 ¥4290

トクヴィル選集

『アメリカのデモクラシー』の著
者の論文、演説、旅行記、書簡
を厳選収録。その全貌を初めて
一書に。富永茂樹編監訳 ¥7700

スコットランド道徳哲学

感情主義・自然主義・歴史主義

中村隆文 近代への移行期に、
共感と利己、富と徳の両立を目
指した哲学史上の転換点を追い、
その現代的意義を問う。¥4730

東京文京本郷

2丁目 20-7

tel. 3814-0131 fax 3818-6435(税別)

www.ms2.co.jp

みすず書房

「お金を出して情報を買う」という行為のハードルが上がっているように感じる。インターネット上でパットと公式や用語を調べられる世の中で、書籍からしか得られないものは何か。ネットの情報は真偽が怪しく、それに比して編集や校正をしっかりとっている書籍は情報の正確性・信頼性に強みがあるともいわれる。だが、本当にそうなのかと感じさせられる書籍の回収も何度か目の当たりにしてきた。

それでも出版されるまでに多くの人の目を通して出版される書籍からの情報と、なんの検証も経ずに誰か一人だけの思いでまとめられている可能性の高いネットの情報を等価に扱うのはいかがなものか。出版社のみなさまには期待も込めて、人手不足が著しいなか、情報の信頼性をどう確保・維持していくかを考えていただきたい。

一方で表面的な知識でよいと思っている人が、果たして学術書にまで手を伸ばすだろうかとの思いもある。もはや「多くの人に読んでもらうために安価で平易なものを」という考えは捨てて、限られた層に向けて書籍でしか表現できない重厚な学術書を出版していくこと、原点回帰のようではあるが、それこそが学術書の本来目指すべき姿なのではないだろうか。今こそ、これまでとは違う学術書の方向性を真剣に考え直す時期なのではと思っている。学術書をメインに販売し、それに応えてくださるお客様に支えられている本郷書籍部であっても、このままの状況が続き、先細りする未来しか見えない、というのはあまりに悲しい。

「そうはいっても大学生協全体を見れば、多くの学生が教科書を生協で買う以上、教科書を含む学術書の売れ行きは良好だろう」と思われる方もいらっしゃるかもしれない。だが、決してそんなことはない。

ここには異なる角度からのデジタル化の影響がある。たとえば、幼少期からECサイトの利用が当たり前の世代にとっては、そちらで書籍を購入するほうが生協で購入するよりも手軽だろう。またフリマサイトを使えば、安く簡単に入手できるため、教科書を新本で購入してもらうことが次第に難しくなってきた。加えて板書ではなくレジュメ資料がデータで提供される講義も増えてきていると聞く。教員が自前の資料を配布して講義を行うことが主流になってきては、もはや教科書を使って講義をする必要がなくなりつつあるのも仕方がないように思われてならない。

書籍を手にもらうには

このように、教科書を含む学術書をいまままでおり販売していたのでは利用が減る一方なので、何かしなくてはいけないとの思いではいるのだが、購入してもらおうハードルは年々高くなってきた。

コスパに対する意識もシビアになっていると感じる。たとえば、店頭で内容がある程度見て「よさそうだから買う」というような人はだんだんと減ってきているし、以前なら買った書籍がハズレだったとしても、それはそれで一

つの経験だという風潮があったが、いまや確信を持って「よい」といえる書籍でないと思わぬ人が多い印象だ。

ちなみに東大生協では本郷と駒場それぞれで毎月ランキングを発表しているが、ランキング上位の書籍は翌月さらに売れる傾向がある。「他の人がよいと思う書籍なら」と購入を決める人が増えているのではないか。そうした傾向も意識し、本郷書籍部のベストセラーコーナーを展開したり、「東大生協で一番売れた本」などの帯の書籍を目につく場所に陳列したりしている。本郷書籍部で売れた書籍は「東大生が読んでいる本」としてメディアに取り上げられることも多いので、トレンド発信という意味でも重要な役割を担っていると自負している。より多くの方に来店いただき、トレンドを生み出してもらえよう、魅力的な書店づくりのための努力・工夫をこれからも続けていきたい。

最近ではゼロから自分の求める書籍を見つけるのが難しい人もいるのでは、とも感じている。そこで、ランクインした著者へ選書いただいたオススメ本のコーナーを展開しているが、「あの著者のオススメなら」と手を伸ばしていただけにいるようなので、継続的に実施していきたい。

お客様の声に

学術書を販売していて感じることは、書きたい人は多いのに読む人は少ない、つまり学術出版業界がアンバランスな市場になりつつあるということだ。正直なところ、今後

学術書から大ヒット作が生まれることはないだろう。話題になってもすぐに要約され、それが簡単に入手できてしまう時代に、難しく挫折するかもしれない書籍に時間とお金をかけてまで挑戦する人がどれだけののだろうか。

いわずもがな、新たな知を形あるものにして後世に残していくのは重要なことだ。新刊本を否定しているのではない。ただ、それらと同じように目を向けてほしいものがある。品切れ・重版未定となっている書籍たちだ。

ある学術書の参考文献に挙がっている書籍や、指定された教科書を調べると、品切れ・重版未定となっていることが年々増えている。継続的な実売の見込めない書籍を在庫として抱えることが難しいのはもちろん理解している。ただお客様が求めている書籍をお断りしないといけないのもとても心苦しいという点も、どうかご理解いただきたい。

これを解消し得る方策はないのだろうか。こういう書籍こそ電子化して販売を維持することはできないだろうか。著作権の問題が電子版の刊行を難しくしていると聞く。そこをどうにか解決し、電子版だけでも読めるような環境を整備していただけないものか。さらに欲を出させてもらうなら、デジタル印刷で一冊から手軽に、かつ現在の常識である納期一ヶ月を短縮して、品切れ・重版未定の学術書を購入入できるようにしていただけないものか。そうした環境整備がより一層研究活動のサポートになると確信しているのだ。

大学出版部ニュース

表示価格は税込です。

大学出版部協会・活動報告

一〇月二三日(木) 一四時〇〇分～

第四回 編集部会

及び秋季研修会 開催※

一〇月二四日(金) 一四時〇〇分～

第五回 営業部会 開催※

一〇月三一日(金) 一五時三〇分～

第五回 理事会 開催※

十一月一四日(金) 一四時〇〇分～

第六回 営業部会 開催※

十二月五日(金) 一三時三〇分～

第七回 理事会 開催

第五回 編集部会 開催 一五時〇〇分～

第七回 営業部会 開催 一五時〇〇分～

於…専修大学(神田校舎七号館)

一七時一五分～

年末懇親会(神保町 かつら)

(※理事会・部会はZOOMでの開催)

北海道大学出版会

- ▼横井敏郎・巖平・潘昆峰・張揚編著『教育格差是正政策の日中比較―教員確保・学校存続・教育機会保障―』(A5判・二六四頁・六九三〇円) 教員不足や身分保障、学校の小規模化と再編統合、教育機会の格差・不平等。これらの問題に関する日中の教育制度・政策の特質と課題を両国の研究者が本格的に論じた論文集。
- ▼有満保江著『オーストラリア文学の地平―「主体の消滅」を問う』(四六判・二八八頁・四九五〇円) グローバル化が進行する中、国民国家を背景とした小説は大きく変容している。アポリジナルを含む多文化社会オーストラリアの文学に即し、作者という「主体の消滅」を検証する。「豪日交流基金助成」
- ▼増井暁夫著『図説世界のコムラサキ』(A4判・二七六頁・四四〇〇円) コムラサキ亜科全21属97種の標本写真九百点以上をカラープレート一七二頁に図示。世界各地での採集・収集、ロンドン自然史博物館などの所蔵標本を撮影してきた著者の約四十年に及ぶ成果を集大成した専門図鑑。

弘前大学出版会

▼杉山祐子編著／小川了・坂井真紀子・阪本公美子・白石壮一郎・鶴田格・友松夕香・山本志乃著『くらしが変えるお金の意味―アフリカと日本の地方にみる人びとの営み』(A5判・三四〇頁・二七五〇円) 市場経済化が進む中でアフリカ農村の人びとは、お金に経済取引とは別の意味を与えて食物の分かちあいと相互扶助のネットワークに埋め込み、少ないお金でくらしを安定させる技法を錬りあげた。お金の取引で知りあう相手と親しさを育み、お金を介さず助けあう関係を発達させる。それを機に外の技術を取り込み、共同で新しい活動を生みだしていく。お金をめぐる実践のこうした特徴は、日本の地方農村でも他者との新たな関わりから生まれる試みにつながっている。アフリカと日本の地方における綿密なフィールドワークをもとにしたユニークな本書は、それぞれの地域での実践に焦点をあて、市場経済の論理との距離を保つ営みを活写する。アフリカや日本の地方の現在に関心をもつ学生・研究者、ひとが共にあることの意味を考える一般の読者に勧めたい一冊である。

東北大学出版会

▼東北大学教養教育院編 東北大学教養教育院叢書「大学と教養」第6巻『転換点を生きる』(A5判・二三二頁・二七五〇円) 時代の転換点をどう生きるのかを問う論考集。第一部の「転換点としての現代」では、転換を駆動する力について考察した後、哲学、農学、災害科学の立場から転換点としての時代の実相と執筆自身の研究史における転換点を重ね合わせて論じる。第二部の「未来へ向けて」においては、ゲノム編集など発展する生命操作技術や、コロナ禍から得られた経験を踏まえて来るべきパンデミックにどう立ち向かうか、女性活躍社会をどのようにして実現するかを問い、文明論や美術史学の立場から人類史における転換点について総括的に論ずる。

▼花輪公雄著 東北大学出版会ブックレット005『海洋瑣談』(A5判・一三〇頁・九九〇円) 海洋物理学者によるエッセー集。「イカは鳥の賊」、「平均値」の更新、「研究者冥利の一つ」…。海洋・気象・気候等をテーマに、同領域の科学を知る面白さや時事問題の注目点、専門研究の魅力を軽妙に語る。

流通経済大学出版会

▼中山秀登著『民法の流れ図―債権』(B5判・五二二頁・四九五〇円) いやいよシリーズ完結。債務関係を七五調で表現。契約をすると給付が発生し。ポコポコには、二つの意味がある一つは契約をする別府温泉の坊主地獄のように泥の中から給付という坊主がポコと湧き出る。二つは債権者と債務者というテニスの選手が給付というボールをポコ、ポコと打ち合う。

▼中山秀登著『民法の流れ図―親族』(B5判・一九八頁・二五三〇円) 「親族」の実践原理は弱者を法の強制力をもって無条件に保護することである。本書では、弱者は無条件に保護される権利があり、その義務があるのは、親族か国か、というところまで言及する。

▼中山秀登著『民法の流れ図―相続』(B5判・二一八頁・二七五〇円) 民法の「相続」は遺産に関する市民の気持ちを含んで規定している。「相続」の目的は遺産の無生物化の回避であることを、沼正也博士の理論をもとに本著で著したところまで言及する。

聖徳大学出版会

▼塩美佐枝・古川寿子・河合優子・重安智子・関口明子・井口厚子著『教職実践演習―幼稚園教諭・保育士・保育教諭を指すために』（B5判・一七七頁・一七六〇円）今まで幼児教育に携わるために学んできたものが教諭・保育士・保育教諭の到達目標に照らして身につけたかを確認できるように、いじめ・食育・特別支援・幼保小連携等幅広く載せ、自らの課題を自覚し、不足している知識・技能を補い定着できるようにまとめた一冊。

▼聖徳大学特別支援教育研究室編『一人ひとりのニーズに応える保育と教育―みんなで進める特別支援改訂3版』（A5判・二六七頁・一七六〇円）初学者のための特別支援教育本。コンパクトなハンディサイズに、全障害について、子どもの理解と指導・支援に必要な基礎的知識を盛り込んだ一冊。

▼聖徳大学児童学部児童学科編『新しい児童学への招待』（B5判・一〇三頁・一三五九円）幼児教育・保育・文化・心理の教授陣四〇名が協働制作した入門書。薄手の冊子に児童学の様々な素材が凝縮され学びやすい。

慶應義塾大学出版会

▼イマニ・ペリー著／池田年徳・萩埜亮訳『ブリーズ―息子たちへの手紙』（四六判・二一六頁・二六四〇円）奴隷制を生き延びた祖先たちの記憶。日常に潜む暴力への怒り。愛する子を抱きしめたときの圧倒的な幸福―。母から黒人の息子たちへ「誇りを奪われぬ術」を伝える、希望の書。

▼上村以和於著『歌舞伎 四季の巡り』（四六判・一八四頁・二九七〇円）歌舞伎は、現代にも生きている演劇でもあれば、一面、古来文芸やさまざまな伝承との深い関わりも持っている。「歌舞伎ならではの、歌舞伎にしかありえない芝居」を春夏秋冬の選りすぐりで魅せる【大人のための歌舞伎入門書】。

▼銭清弘著『芸術をカテゴライズすることについて―批評とジャンルの哲学』（四六判・二五六頁・三五二〇円）批評は創造的な社会実践だ！ 絵画や音楽や映画をどう「ジャンル分け」するか？ 分析美学の観点から批評という実践を再考し、単なる分類ではないカテゴライズのダイナミクスを解明する。

専修大学出版局

▼吉田昌幸著『企業家像の経済思想―競争がつくりだす様々な（企業家）』（A5判・二二六頁・三三〇〇円）これまで経済学ではあまり論じられなかった企業家論。本書では、経済学の視点からどのような企業家論が構築できるかを論じ、市場競争論を足がかりに企業家活動が資本主義経済においてどのような役割をもつのかを明らかにする。

▼佐々風太著『柳宗悦 無地の美学』（A5判・二二〇頁・三三〇〇円）柳宗悦にとって「無地」とはいかなるものか。柳の「無地」をめぐる思索は、従来の研究では明確に主題とされてこなかった。本書では、作り手や鑑賞者との関係や「もの」と「無」、「偶発性」とを軸に「無地」という造形を追究する。

▼藤本一美著『戦後政治と「首相演説」4―二〇〇五―二〇二四』（A5判・二六〇頁・三七四〇円）戦後の首相たちはいかなる形で日本の現状と将来の姿を国会議員や国民に披露してきたのか。第四巻は、小泉、安倍、福田、鳩山、菅、野田、安部、菅、岸田、石破首相の演説とマスコミ報道を通して戦後政治の一端を探る。

玉川大学出版部

▼ユリ・シュルヴィッツ著／さくまゆみ
こ訳『シュルヴィッツの絵本論―絵本づくりの実践ノウハウ』（A5判・三八四頁・四一八〇円）絵本作家を志す人に40年読み継がれる実践的な指南書を初邦訳。コールドコット賞受賞作家のユリ・シュルヴィッツが、自身の作品のほか、さまざまな絵本や古今東西の絵画を題材に絵本づくりのすべてを惜しみなく伝授する。



▼川端有子著『児童文学の教科書 改訂新版』（A5判・二四〇頁・二五三〇円）子どもの本を学びたいおとなたちの入門書に待望の改訂新版登場！ 初版刊行から約10年。子どもの本をとりまく状況の変化に対応するべく、一部構成を組みかえ、内容や表現、とりあげる作品を見直し。専門家によるコラムを新たに一本追加したほか、便利なおすすめブックリストも更新。

中央大学出版部

▼森勇編著『ドイツ弁護士職業法研究』（A5判・六九六頁・九一三〇円）ドイツ弁護士職業法制の基礎を形作る憲法的視角と弁護士を取り巻く環境の変化へのその対応のスピード感をうかがい知る好個の書。

▼福島弘著『刑事訴訟で問われる刑法の理論II』（A5判・九八四頁・九六八〇円）刑法の法律専門書。テーマは、共同正犯と危険犯。主要判例を歴史的順番に従って検討することにより、新たな世界が見えてくる。

▼新井裕著『十九世紀ウィーン民衆劇の世界』（四六判・四三六頁・五〇六〇円）本邦初ウィーン民衆劇史、エリート向け国民劇場創設が、思いがけず民衆劇場の興隆をもたらすという喜劇。楽友協会の成立と歌う人々。

▼高橋宏幸著『ドイツ・コンツェルンの現代的展開』（A5判・五八二頁・六三八〇円）兼任取締役による人的ネットワークと契約コンツェルン、コンツェルン指揮力の強化、権限強化は、今や社会全般への循環的関係に変化をもたらしている状況を考察する。

東京大学出版会

▼五味文彦著『人物でたどる日本の歴史』（四六判・二五六頁・二六四〇円）古代から近代に至る象徴的人物の生涯や後世への遺産を、独自の切り口から描き出し、日本史の大きな流れを提示する。東京大学出版会創立75周年記念出版。

▼若林悠著『象象庁―危機と改革の時代を超えて』（四六判・二四〇頁・四六二〇円）自然災害が絶えない日本で、気象庁はいかなる役割を担い、社会とどのように向き合うのか―平成から令和の時代の模索の跡を辿り、今後を展望する。

▼加藤耕一著『建築のラグジュアリー―物質と構築がつむぐ建築史』（四六判・三八六頁・三九六〇円）時間変化にさらされる「物質（モノ）」としての建築と、時間をこえる「建てる技芸」としての建築。ふたつの視点から西洋建築を捉え直し、豊かな建築文化のありかを示す。

▼三枝洋一著『ラングランズ予想』（A5判・三八四頁・四八四〇円）数学の大統一理論「ラングランズ予想」の内容と進展を、できるだけ少ない前提知識のもとで解説する画期的な書。数学の美しさと力強さを実感すること間違いなし。

東京電機大学出版局

▼木場裕紀著『教育学入門―AIで深める学び』（A5判・一八四頁・二五三〇円）教職課程における「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」に対応する初学者向けの教科書。学生が自身の教育経験に基づいて抱きがちな固定観念を学びほぐし（unpack）、教育を多面的にとらえる思考力を育むことを目的としている。特徴は、AIを学習と対話の「きつかけ」として活用している点。AIの出力をあえて検討対象とし、思考を深める素材として使うという先進的な内容で、探究型学習との親和性が高くなるよう構成。

▼吉川忠久著／ＱＣＱ企画編著『航空無線通信士試験 集中ゼミ』（A5判・三五二頁・三一九〇円）最新の出題傾向を分析し新傾向問題に対応。定評ある著者による充実の解説。試験合格への実力養成。計算問題は詳細な計算過程を示し、間違いやすい問題には、詳しい解説に加えて解法のポイントやテクニクを記載。またネイティブによる「英会話」問題の音声付きで英語対策もばっちり。さらに改正法（令和7年6月・10月施行）にも対応した最新版。

法政大学出版局

▼高原太一著『砂川闘争とは何か―連帯の民衆史』（四六判・五八〇頁・四九五〇円）「土地に杭は打たれても心に杭は打たれない」。米軍立川基地の滑走路拡張計画への抵抗運動の生きられた実相を描く。

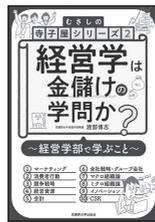
▼E・マセ著／山下雅之訳『家長長制以後』（四六判・一九四頁・三三〇〇円）人類史を規定してきた男性中心主義や異性愛中心主義の規範が正統性を失ったポスト家長長制のジェンダー編成と、その葛藤や揺らぎを気鋭の社会学者が分析。

▼斉藤毅著『石原吉郎の詩の構造―他者言語、世界』（四六判・三八二頁・四一八〇円）シベリアの強制収容所を生き延び、難解さをもって知られる詩人のテクニクの「構造」に初めて全面的に焦点をあてて、解きほぐす画期的な試み。

▼孫石熙著／権学俊訳『場面―報道の現場から見つめた韓国社会』（四六判・四〇〇頁・三三〇〇円）セウォル号沈没事故、朴大統領の弾劾、MeToo運動など、社会を大きく揺るがす事件が立て続けに起きるなか、苦悩しながら信念を貫くジャーナリストのエッセイ。韓国で大反響を呼んだ書、ついに邦訳。

武蔵野大学出版会

▼渡部博志著（むさしの寺子屋シリーズ2）『経営学は金儲けの学問か？』（A5判・一六八頁・一七六〇円）経営学部の教授が「経営学」の主要な分野をやさしく解説。それぞれのつながりがイメージできる構成内容にしたことで、「経営学」の学びの全体像を把握できる。



▼阿部和穂著（むさしの寺子屋シリーズ1）『副作用がなければ薬じゃない?』（A5判・二〇四頁・一七六〇円）「いま薬が不足しているのはなぜか?」「薬を飲み忘れたらどうする?」「なぜ『お薬手帳』が必要なの?」など、すぐに役立つ薬の雑学を薬学部の教授がやさしく解説!



武蔵野美術大学出版局

▼寺山祐策監修『オットー・ノイラート「アイソタイプ」を読む』(B5変型判・一四四頁・三五二〇円) 第一次世界大戦で疲弊したウィーン市民への啓蒙を端緒に、人口や経済など「目に見えない」対象をピクトグラム(絵文字)により視覚化したノイラート。*words divide, pictures unite(言葉は分け、絵は結びつける)という彼の主張は、戦争による様々な断を是正しようとする希求が根底にあった。社会経済学者であり、教育者でもあった彼は、誰にでも一目でわかる情報を提供するシステム「アイソタイプ」を確立した。その画期的なシステムは、科学者をはじめとする各専門家から提供されたデータを精査するトランスフォーマーと、それを見えるかたちにするデザイナーの協働により成り立っている。本書では「なぜ今アイソタイプなのか」を巻頭に据え、ピクトグラムの定義・原理を踏まえ、豊富な図版を使用して六つの「読み解き」と、三つの「精読」によりトランスフォーマーの意図を解析。ヴィジュアル・コミュニケーション・デザインの本質に迫る。

早稲田大学出版部

▼青木則幸著『棚卸資産担保金融の対抗関係の規律―日米比較立法研究序説』(A5判・五二〇頁・七九二〇円) わが国の集合財産譲渡担保に相応する米国の棚卸資産担保金融について、その規律の歴史を遡る。米法の規律の基礎にある「秘匿による詐欺の法理」に対する日米両国の捉え方の違いは、それぞれの立法政策にどのような違いをもたらしたか。

▼小倉健裕著『フランス会社法における新株発行規制―株主総会によるコントロール』(A5判・二六四頁・五五〇〇円) 株主の利益保護を重視するフランス会社法。同法における新株発行規制について、特別総会と取締役会の関係、優先引受権などに着目しつつ、条文を克明に辿る。

▼伊藤怜著『トウスカーニアのサン・ピエトロ旧司教座聖堂壁画―聖堂裝飾プログラムをめぐる試論』(A5判・三〇八頁・五五〇〇円) サン・ピエトロ旧司教座聖堂に描かれた中世イタリアの壁画裝飾について、アプシスと南北小アプシスの配置や組合せ、南小祭室、勝利門壁画、内陣北壁、クリュプタを画像学的に論じ、同聖堂の裝飾プログラムを提唱する。

関東学院大学出版会

▼バプテスト研究プロジェクト編『バプテストの歴史と思想研究⑨』(A5判・一九二頁・二〇九〇円) 関東学院大学(キリスト教と文化研究所)が発表するバプテスト研究論文集の最新号。第一章では、ベンジャミン・キーチとジョン・オーウェンの新生理解を紐解きつつ、バプテストという新生共同体の課題を浮き彫りにする。第二章では、一六四〇〜一六七〇年代の論争や信仰告白文の分析を基に、黎明期から初期バプテストにおけるAssociation形成の編成とその位置づけを明らかにする。第三章では、一九五〇年代の活動に焦点を当てつつ、B・L・ヒンチマンの平和思想について解説する。第四章では、一九四五年の敗戦から一九四九年における熊野清樹の活動を通して、日本における新たなバプテストの歩み出しの時期について紹介する。第五章にはG・E・ライダー『東京バプテスト女子学寮物語』(一九四八年)日本語訳の「その1」に当たる部分を掲載する。

名古屋大学出版会

- ▼J・R・ブランドン著／小田中章浩・岩井眞實訳『歌舞伎の戦争―十五年戦争とその影』（A5判・三八〇頁・六九三〇円）今や「国宝」的な古典芸能となっている歌舞伎は、戦争とどう向き合ったのか。忘れられたもう一つの歴史。
- ▼犬塚元・壽里竜・池田和央訳『ヒューム イングランド史Ⅱ』（A5判・五六四十四九六頁・各九三五〇円）啓蒙の歴史叙述の最高傑作にして、ヒューム思想の結晶。網羅的な資料調査と綿密な校訂にもとづき初めて邦訳。
- ▼金井郁・申琪榮著『生保レディ』の現代史―保険大国の形成とジェンダー』（A5判・三二五二頁・五九四〇円）生命保険産業の発展を支えた女性営業職員に着目。大量採用・離職から成果給までその実像を初めて解明する。
- ▼J・A・トーマス、M・ウィリアムズ、J・ザラシェヴィクシユ著／加三千宣訳『人新世再入門―その本質を多面的にとらえる』（A5判・二八八頁・三八五〇円）現前する危機とは。最も信頼できる著者による、「文系」「理系」を横断する待望の書。

名古屋外国語大学出版会

- ▼呂雷寧／中井政喜訳『矛盾回想録―私の歩んできた道』（A5判・上巻五八八頁・下巻六〇六頁・共に四九五〇円）魯迅とともに近代文学を牽引した、近代中国の大作家・茅盾の自伝。混迷の時代と戦い続けながら数々の優れた小説、評論、エッセイを遺し、翻訳、編集などに邁進した茅盾。卓越した文人の詳細な記録でもある第一級資料が、初めて日本語に訳された。貴重な写真、家系図、詳細な訳者注、解説、年表、地図なども収録。
- ▼佐原秋生・大岩昌子著『食材と調理の世界地図』（四六判・二三八頁・二二〇〇円）生きることは食べること。人間は火を使い始める以前から、さまざまな自然の食材を手に入れ食べていた。肉、野菜、穀物などに、いったいどのような調理をほどこしてきたのか。世界の食材と調理について、豊かなその「地図」を分類・整理しまとめた、読んでも楽しいガイド。



京都大学学術出版会

- ▼安酸敏眞・田中智子・小柳敦史編『有賀鐵太郎 大いなる学究の軌跡』（A5判・七六六頁・九九〇〇円）日本のキリスト教研究で重要な役割を果たした有賀鐵太郎の研究業績を、彼の人生の歩みと歴史的状况との関連で再評価する。後半部では、講義ノート、書簡や追悼文など、貴重な未公開資料をまとめて提示する。
- ▼西井涼子編『死を感受する―情動論から生の潜在性へ』（A5判・四〇八頁・三八五〇円）死者は如何に私のなかで（生きて）いるのか。葬儀の変化やデスマスク、死と死者をめぐる記憶の語りなど死をめぐる様々な現実から、これまで確固としたもののみえていた生から、「こうありえたかもしれない」別様の生に迫る。
- ▼飯塚一幸編『塩田地主野崎家―地方資産家の活動と日本の近代化・帝国化』（A5判・六四二頁・一五四〇〇円）近世後期、足袋製造から塩田経営に転じ「塩田王」と称された野崎家。その巨大地主経営、政治活動、社会貢献の実像を、約10万点に迫る史料群から多角的に解明。日本近代史における地方資産家の役割を問い直す。

大阪大学出版会

▼ピエール・イヴ・ドンゼ著『ロレックスの経営史―「ものづくり」から「ゆめづくり」へ』（A5判・二四〇頁・二九七〇円）スイスの小さな時計製造会社は、いかにして時計をステイタスシンボルに変えることに成功したのか。世界的な成功に至るまでの経営史とデザイン・マネジメント秘話。

▼斎藤理生著『ごく短い小説の研究―現代日本掌編文学論』（A5判・四三二頁・八八〇〇円）「コント」「けし粒小説」「ショートショート」：すがたかたちを変え人々に親しまれてきた「ごく短い小説」の掌編文学の百年を検証。新聞との関係を考察する一方、太宰治、三島由紀夫、村上春樹らによる個別の作品にも迫る。

▼大林のり子著『演出家・マックス・ラインハルトの舞台創造―協働演出による祝祭劇の実践』（A5判・五四二頁・八五八〇円）演出家マックス・ラインハルトの演劇・劇場・上演の特性を、一次資料等や協働者との関係から読み解き、演出家像の再考を試みる。

関西大学出版部

▼近藤誠司著『いのちのメッセージ―災害情報学からの贈り物』（A5判・二三二頁・三七四〇円）防災業界が状況を呈している今だからこそ、いのちの根本哲学に根差した災害情報学を確立することが求められている。「死ななければよい」というサイバビリティに固執することなく、主体が生まれてくる以前の生命の根源にこそを浸していこうとしている。著者一〇年の研究・実践活動の軌跡をまとめた瑞々しいアンソロジー。

▼久保田賢一著『新版 構成主義パラダイムと学習環境デザイン』（A5判・一二六頁・一六五〇円）構成主義と実証主義を比較、構成主義パラダイムの観点から二一世紀の教育実践と教育研究を概説。一元的な能力観を脱却し、学び手が協働して取り組む二一世紀の学習環境デザインを展望する。二〇〇〇年刊行『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』の新版。



関西学院大学出版会

▼河村克俊著『カントと啓蒙の時代』（A5判・二二六頁・四九五〇円）18世紀ドイツ哲学史の脈絡のうちにカントを置き、このコンテクストのうちにみられ、この時代を特徴づける幾つかの概念を通じて、カント哲学とその時代の思想的土壌を明らかにする。

▼山口隆之著『フランスの中小企業政策―小規模企業・中堅企業・クラスター』（A5判・二六〇頁・六一六〇円）多様性の中の統合を目指すEUの影響下で、フランスの中小企業政策は近年いかに変化しているのか。政策立案の背景や政策評価の考察を通じて多様性と社会性という中小企業評価軸の重要性を指摘。

▼田中耕一著『ポスト「社会」の時代―社会の市場化と個人の企業化のゆくえ』（A5判・一八六頁・二七五〇円）社会学がとらえてきた、個人と全体の媒介としての「社会」のはたらきは、しだいにより合理的で「滑らかな」統治に置き換えられ、今やポスト「社会」の時代へ向かっていることを明らかにする。

九州大学出版会

編集後記

▼宮崎聖子著『植民地期台湾における女子青年団―教化、地域と女性の主体―』（A5判・二九二頁・七四八〇円）日本による植民地統治下の台湾で行われた青年期の女子に対する社会教育について、総督府の政策とその受け手となった人々の諸相という二つの側面から、史資料とインタビューに基づき分析する。

▼森竹希望著『Nominal Licensing and Agree in Syntactic Theory: The Default Feature Specification on the Phase Heads and Its Theoretical Implications』（菊判・三一〇頁・一一〇〇〇円）生成文法理論に基づき、格と一致現象から人間に生得的な言語機能の「デフォルト」特性を解き明かす。（九州大学人文学叢書25）

▼高晨曦著『サービス論争の三〇〇年―欲求の視点に基づく一般理論の提案』（A5判・四四〇頁・九六八〇円）サービスまたはサービス経済の特徴と性格をどう捉えるべきかをめぐる「サービス論争」のなかで提起されるいくつかの重大な課題の解決を目指す。第二六回（二〇二五年度）経済理論学会奨励賞受賞。

▼今号は、ともすれば随分と内向きになつてしまつたかもしれない。しかし、大学出版部協会のキャッチフレーズである「大学と社会を結び、知のネットワークの『大学と社会』を繋ぐ媒体である『学術書』を『どのように届けるか』こそ我々がいま改めて向き合うべき課題ではないかと感じてゐる。そのため、必ずや読んでくれるであろう加盟出版部各位にすこしでも資するものを、と考えた結果が本特集である。奇しくもその編集作業の最中、待ちに待つた某書店本店のリニューアル・オープンの実情が明らかにされた。紡がれる言葉とイメージ図から、どの／誰が／どれほど本気なのか改めてなんとなくわかつた気がする。脚下照顧、意義を訴えるだけでは立ち行かず出口も見えない現状を前に、もはや業界全体として撤退戦がデフォルトになつてしまつてゐるのではなからうか。

▼本特集を読み返してみると、とりもなおさず菊池氏がいう「凡事徹底（当たり前）の徹底（徹底的）を徹底して実行する」ということに尽きるところと思われる。出版社は自社の内容・要点理解、書店との関係構

築に努め、ノウハウや周辺知識をふくむ情報を適切に共有すること。図書館は近隣の他の施設との連携強化により相補的に知へのアクセス可能性を担保していくこと。他方で書店からは、お金を払うに値するだけのクオリティに関する要望をお寄せいただいた。もちろん、そうするだけの時間的・人的余裕がないほどまでには切り詰められているという現状も一部ではあるだろう。だが、結局はそこから何か何事も始まらない以上、できるところからやつていくしかないのではないだろうか。▼多くの出版社が取り組んでおられるライト化戦略——もっと平易に！働いていても読めるように！——を安直に採用することができない私たちにとり、「まだ何ができるか」との問いはいっそう切実なものである。その答えを出すのは決して容易ではないだろうが、「作つて終わり」ではないことは確かである以上、どのように大学と社会を結びつけていくか、引きつづき模索したい。

- 創栄図書印刷(株) 〒604-0812 京都府京都市中京区高倉通二条上ル天守町766
TEL 075-255-2288 <https://www.soei-pb.co.jp>
- 大同印刷(株) 〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
TEL 0952-71-8550 <https://www.daidou-jp.com>
- ダイニック(株) 〒105-0004 東京都港区新橋6-17-19 新御成門ビル
TEL 03-5402-1811 <https://www.dynic.co.jp>
- (株) 太平印刷社 〒140-0002 東京都品川区東品川1-6-16
TEL 03-3474-2821 <http://www.p-taihei.co.jp>
- (株) 太洋社 〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
TEL 058-324-2111 <https://www.p-taiyosha.co.jp>
- (株) 竹尾 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
TEL 03-3292-3617 <https://www.takeo.co.jp>
- (株) 東京出版サービスセンター 〒110-0016 東京都台東区台東1-33-6 セントオフィス秋葉原401
TEL 03-5688-5801 <https://www.c-enter.com/>
- (株) とうこう・あい 〒104-0061 東京都中央区銀座7-13-12 サクセス銀座7ビル4F
TEL 03-5148-7200 <https://www.toko-ai.com>
- (株) トーヨー企画 〒602-0923 京都府京都市上京区油小路通中立売上ル 油橋詰町93-7
TEL 075-411-8288 <https://www.talligent.jp>
- (株) 日新広告社 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-12-10 喜久屋ビル3F
TEL 03-3263-9431 <http://www.nissinkoukokusyua.com>
- (株) 日本経済新聞社 〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7
TEL 03-6256-7528 <https://www.nikkei.co.jp>
- 日本宣伝販売(株) 〒330-0856 埼玉県さいたま市大宮区三橋3-278
TEL 048-620-1021 <http://www.nihon-senden.jp>
- (株) 博報堂 〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー19F
TEL 03-6441-6711 <https://www.hakuhodo.co.jp>
- 藤原印刷(株) 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-4-5
TEL 03-3291-0191 <https://www.fujiwara-i.com>
- (株) 平文社 〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
TEL 03-3944-0301 <http://www.heibun.co.jp>
- (株) 毎日新聞社 〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
TEL 03-3212-3340 <https://www.mainichi.co.jp>
- 誠製本(株) 〒175-0081 東京都板橋区新河岸3-13-1
TEL 03-4212-2735 <http://www.makoto-seihon.com>
- (株) 遊文舎 〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
TEL 06-6304-9325 <http://www.yubun.co.jp>
- (株) 読売新聞東京本社 〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
TEL 03-3242-1111 <https://www.yomiuri.co.jp>

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援くださる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同くださり、ご支援いただいている各社様をご紹介します。

一般社団法人 大学出版部協会 賛助会員名簿

- (株)朝日新聞社 〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
TEL 03-5540-7749 <https://www.asahi.com>
- 重細重印刷(株) 〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
TEL 026-243-4858 <http://www.asia-p.co.jp>
- (株)アベル社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 東京三和ビル301
TEL 03-6256-8133 <https://www.abel-sha.com>
- 尼崎印刷(株) 〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
TEL 06-6494-1122 <http://www.ainai.co.jp>
- 英文校正エナゴ 〒101-0021 東京都千代田区外神田2-14-10 第2電波ビル4F クリムゾンインタラクティブジャパン
<https://www.enago.jp/>
- (株)ALE 〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-8-6 日本橋ビル4階
TEL 03-5652-8627 <http://www.adv-logi-eng.co.jp>
- 王子製紙(株) 〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
TEL 03-3563-7072 <https://www.ojipaper.co.jp>
- (株)加藤文明社 〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2-15-6 K-STAGE
TEL 03-3261-8281 <http://www.bunmeisha.co.jp>
- 城島印刷(株) 〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
TEL 092-531-7102 <https://www.kijima-p.co.jp>
- (株)糸川印刷 〒112-0012 東京都文京区大塚6-9-7
TEL 03-3943-9811 <http://www.kumekawa.jp>
- (株)広済堂ネクスト 〒105-0023 東京都港区芝浦1-2-3 シーバンスS館13F
TEL 03-3453-0556 <https://www.kosaido-next.co.jp/>
- 港北メディアサービス(株) 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
TEL 03-5466-2201 <http://www.kohoku.co.jp>
- ㈱Congre-パブリケーション 〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング5階
TEL 03-3510-3750 <https://www.congre-gc.co.jp>
- 三美印刷(株) 〒116-0013 東京都荒川区西日暮里6-28-1
TEL 03-6807-8377 <https://www.sanbi.co.jp>
- 三立工芸(株) 〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
TEL 03-3261-5171 <https://www.sanritsu-net.co.jp>
- 三和印刷(株) 〒381-2226 長野県長野市川中島町今井1822-1
TEL 026-285-2300 <http://www.sanwaprinting.jp>
- 信濃印刷(株) 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
TEL 03-3237-3601 <http://www.shinano-insatsu.co.jp>
- (株)渋谷文泉閣 〒380-0804 長野県長野市三輪荒屋1196-7
TEL 026-244-7185 <http://www.bunsenkaku.co.jp>
- (株)眞興社 〒150-0033 東京都渋谷区猿楽町19-2
TEL 03-3462-1181 <https://www.shinkousha.co.jp>
- 新日本印刷(株) 〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
TEL 03-3269-3611 <https://www.sinnihon.net>
- (株)精興社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-9
TEL 03-3293-3021 <https://www.seikosha-p.co.jp>
-



食権力の現代史

—ナチス「飢餓計画」とその水脈

藤原辰史著

四六判並製 324頁 定価 2,970円

史上最大の殺人計画「飢餓計画」。ソ連の住民3000万人の餓死を目標としたこのナチスの計画は、どこから来てどこへ向かったのか。飢餓を終えられない現代社会の根源を探る画期的歴史論考。好評3刷 ISBN:978-4-409-51108-4



お土産の文化人類学

—地域性と真正性をめぐって

鈴木美香子著

四六判並製 200頁 定価 2,640円

「東京ばな奈」は、なぜ東京土産の定番になったのか?そして、なぜ菓子土産は日本中にあふれかえるようになったのか?調査点数 1073点、身近な謎に丹念な調査で挑む画期的研究。重版出来。 ISBN:978-4-409-53052-8



脱暴力の臨床社会学

中村正著

四六判並製 390頁 定価 5,280円

加害男性のカウンセリングに長年携わってきたからこそ見えてくる、暴力と結びついた男性性を手放すための方法、あるいは社会から暴力を縮減させるためのアプローチとは。臨床社会学からの画期的提言。 ISBN:978-4-409-24176-9



サンタクロースの文化史

—古代ヨーロッパから現代日本へ

水口寿穂著

四六判並製 266頁 定価 2,970円

古来には民間信仰の神として褒美や罰を与えていた「サンタクロース」は、どのようにして現在の姿へと変貌を遂げ、クリスマスのシンボルとして日本に定着したのか。知られざる大衆文化の歴史! ISBN:978-4-409-53053-5



ネクロポリティクス

—死の政治学

アシル・ンベン著 岩崎稔/小田原琳訳

四六判上製 340頁 定価 4,950円

ファノンの精神医学的な分析をもとに、フーコーの生政治の概念を発展させ、どのように政治から民主主義が退出し、憎しみの社会へと変質しているのかを論じる。全人類への警鐘の書。 ISBN:978-4-409-04129-1



枢軸

—ベルリン・ローマ・東京一九一九—一九四六年

ダニエル・ヘディング著

清水雅大 監訳 山本晶子/山根徹也 訳

A5判上製 522頁 定価 8,800円

新たな社会的・文化的・地政学的秩序を構想した枢軸国。ファシズムの引力は、いかにして世界をかかつてないほどの大規模戦争に引きずり込んだのか。枢軸の形成・拡大と世界大戦に至るプロセスを描いた巨編。 ISBN:978-4-409-51109-1



フランス論 2.0

大浦康介 編

四六判並製 224頁 定価 2,970円

なぜフランスは(それでも)強いのか?フランス人の実像、#MeToo 運動、パリオリンピックによるフランスの複雑性…。複眼的アプローチにより「フランスらしさ」のゆくえをさぐる。 ISBN:978-4-409-14072-7



ソシユールとインド

—構造主義の源流を求めて

川村悠人著

四六判並製 240頁 定価 3,080円

ソシユールと古代インド、時を越えて響きあう思想の類似ははたして偶然なのか。インド文学の気鋭が厳密な比較考察で挑む、思想史を塗り替える可能性を秘めた比類なき知的冒険。 ISBN:978-4-409-03143-8

一般社団法人 大学出版部協会 加盟出版部一覽

◎北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目
北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

◎弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地
弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

◎東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

◎流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市中平畑120
TEL 0297-60-1167 FAX 0297-60-1165

◎聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

◎慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

◎専修大学出版局

〒101-0051 千代田区神田神保町3-10-3
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

◎玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

◎中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

◎東京大学出版会

〒153-0041 目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069 FAX 03-6407-1991

◎東京電機大学出版局

〒120-8551 足立区千住旭町5番
TEL 03-5284-5385 FAX 03-5284-5387

◎法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-3
法政大学九段校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

◎武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20
武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

◎武蔵野美術大学出版局

〒187-8505 小平市小川町1-736
TEL 042-342-5515 FAX 042-342-9542

◎早稲田大学出版部

〒169-0051 新宿区西早稲田1-9-12
TEL 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

◎関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-5906 FAX 045-785-9572

◎名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市千種区不老町1
名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

◎名古屋外国語大学出版会

〒470-0197 日進市岩崎町竹ノ山57
名古屋外国語大学内
TEL 0561-75-2503 FAX 0561-75-1723

◎京都大学学术出版会

〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町69
京都大学吉田南構内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

◎大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7
大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

◎関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-0238 FAX 06-6389-5162

◎関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-7002 FAX 0798-53-5870

◎九州大学出版会

〒819-0385 福岡市西区元岡744
九州大学パブリック4号館302号室
TEL 092-836-8256 FAX 092-836-8236

◎大阪経済法科大学出版部(休会)

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-9129 FAX 072-941-9979

【発行所】

一般社団法人 大学出版部協会
ISSN 0913-3305
振替 00170-8-389131

〒102-0073
東京都千代田区九段北1丁目14番13号
メゾン萬六403号室
TEL 03-3511-2091 FAX 03-3511-2092
E-mail : mail@ajup-net.com
URL : <https://www.ajup-net.com/>

【表紙デザイン】 奥定泰之

【表紙写真】

photo : Mdisk / shutterstock.com



*本誌のバックナンバーは、大学出版部協会の公式HPでも、PDF版を全文無料でダウンロードできます

大学出版145号(2026年冬)

2026年2月2日発行

頒価100円(千共)